

私は一介の研究者として、1979年有史初の噴火以降、40年ほどにわたり、御嶽山で火山活動の調査研究に携わってきた。その研究フィールドで63人を失った戦後最大の噴火災害が起きてしまった。この惨事は今でも私の心に重く迫る。

噴火から4年を数えた。噴火惨事は犠牲者の遺族だけでなく、地元の人々の暮らしに重くのし掛かる。木曾谷の人々が暮らしていくには、御嶽山と共に生きるしかない。そんなことを痛感した4年間だった。その意味で、今回、木曾町により「二の池から剣が峰頂上への登山道」が再開されることに意義を感じる。2014年御嶽山噴火災害の一つの転換点とも考える。

木曾町は噴火警戒レベルが昨年8月にレベル2(火口から概ね1kmの範囲に影響を及ぼす噴火の可能性あり)から、レベル1(活火山であることに留意、噴気活動の活発な噴気孔から概ね500mの範囲では、突発的な火山灰等のごく小規模な噴出に注意が必要)となった。しかし、木曾町や王滝村は緊急時の避難場所が確保できないことから、立入禁止域を火口から概ね1kmから縮小せず、剣が峰頂上や王滝山頂は立入禁止が続いた。

この1年間に木曾町や王滝村は、登山道整備、登山パトロール隊強化、情報連絡網整備、避難所建設など山頂登山再開に備えた。噴火口周辺では、二の池本館(現「二の池山荘」)を修繕し、剣が峰山頂小屋をシェルター(90人収容)に建て替えた。オーナーが代わった二の池新館も「二の池ヒュッテ」として修繕整備され、すでに宿泊客を受け入れている。このような努力を重ねた、今回の「二の池から剣が峰頂上への登山道」が再開となる。再開には木曾谷の人々の努力と「犠牲を二度とださず、御嶽山と共に生きる」という願いが込められている。

私もこの努力と願いを無駄にしたくない。しかし、二度と犠牲をださないためには、地元の木曾町や王滝村の努力だけでは解決できない課題が残る。

一つは国(気象庁)の噴火警戒レベルの適切な運用である。有珠山や三宅島の過去の噴火では噴火前に有感地震が急増した。御嶽山も過去4回の噴火とも山頂付近の地震が活発になった。でも全て体には感じない小規模な地震であり、地元では認識できない。木曾町や王滝村の決意も、気象庁の適切な観測と噴火警戒レベルの対処が原点になる。私は国がこれを肝に銘じ、噴火警戒レベルの適切に運用することを求める。また一刻も早い情報伝達も必要である。

次に県の支援体制が求められる。長野県は研究施設開設や火山マインスター養成やビジターセンター建設準備の取り組みを進める。でも、マインスターは認定したものの、活動費が十分に確保されていない。これらの施設や制度が実質的に活動できるだけの予算も確保してほしい。

再開した二の池ヒュッテ(旧二の池新館)は岐阜県下呂市に位置する。でも御嶽山の情報などは木曾町が協力し提供するという。このように市町村の段階では隣接する自治体の協力が進む。一方、御嶽山防災協議会は長野・岐阜両県合同になりながらも、両県の協力連携体制は強いとはいえない。登山者には県境は見えないだけに、両県の協力連携体制なしで進まない。

「犠牲を二度とださず、御嶽山と共に生きる」と決意した木曾町を国や県も支えていかないと悲劇が繰り返され、木曾谷は立ち直れなくなってしまう。関係団体や企業も支えることが今後の展望を切り開くことと考えてほしい。私も微力ながら御嶽山の火山活動の解明と噴火防災に残された力を注ぎたい。

このような努力と実践で、戦後最大の噴火災害となった御嶽山を最も安心して登れる3000mの活火山にしてほしい。

<sup>1</sup> 連絡先：fumikimata@gmail.com